

2013 年度 小委員会活動成果報告

(2014 年 2 月 10 日作成)

小委員会名	バイオクライマティックデザイン小委員会	主査名：長谷川兼一 就任年月：2011 年 4 月
所属本委員会 (所属運営委員会)	環境工学委員会 (熱環境運営委員会)	委員長名：田辺 新一 主査名：須永修通
設置期間	2013 年 4 月 ～ 2015 年 3 月	
設置目的 各年度活動計画 (箇条書き)	<ul style="list-style-type: none"> ・ 持続可能な建築・都市の実現に寄与するパッシブ要素技術のデータベース化 ・ BD から見た環境建築の評価手法のプロセスの構築に向けた事例評価の試行 ・ 大学での教育現場での環境設計教育の実践例の収集 	
委員構成 (委員名(所属))	委員公募の有無：有	
	主査：長谷川 兼一 (秋田県立大) 幹事：宇野 朋子 (武庫川女子大学), 築山 祐子 (旭化成ホームズ) 委員：金子 尚志 (エステック計画研究所), 北瀬 基哉 (環デザイン舎), 小玉 祐一郎 (神戸芸術工科大), 斉藤 雅也 (札幌市立大), 宿谷 昌則 (東京都市大), 菅原 正則 (宮城教育大), 須永 修通 (首都大東京), 高田真人 (熊本大学) 高間 三郎 (科学応用冷暖研究所), 廣谷 順子 (みつつデザイン研究所), 細井 昭憲 (熊本県立大), リジャル H.B. (東京都市大学)	
設置 WG (WG 名：目的)	適応モデル WG：熱的快適性に関する ASHRAE や CEN の「適応モデル」に関する基準は、年間に渡る様々な地域と建物について現場調査した莫大なデータに基づいている。しかし、日本では現場研究が少ないため、日本各地の住宅やオフィスで熱的快適感調査を行い、莫大なデータ収集と統計的解析によって快適温度を明らかにし、高温多湿気候でも利用可能な適応モデルを提案する。	
2013 年度予算	173,000 円	ホームページ公開の有無：有 委員会 HP アドレス： http://news-sv.ajj.or.jp/kankyo/s14/

項 目	自己評価		
委員会開催数	4	回 (年度内計画を含む)	
刊行物 (シンポジウム資料等は除く)	1. なし		
講習会	1. なし	参加者数	名
催し物 (シンポジウム・セミナー等) *能力開発支援事業委員会 承認企画	1. なし	参加者数	名
	2.	参加者数	名
大会研究集会	1. なし	参加者数	名
対外的意見表明・パブリックコメント等	1. なし		

<p>目標の達成度 (当初の活動計画と得られた成果との関係)</p>	<p>1. 本年度大会直後に、札幌のバイオクライマティック建築を巡るツアーを企画し環境建築事例の蓄積を図るとともに、建築家とのディスカッションを通じて、BD 建築の評価プロセスや環境調整に対する居住者参加の重要性を共有した。</p> <p>2. 今年度の小委員会を4回開催した。委員会開催を適応モデルWGと合同し、住まい手の環境調整行動を考慮した建築環境の評価手法の構築に関する議論を深めるとともに、環境データ取得のための調査の企画を進めた。</p> <p>3. 大学での環境設計教育に関する事例を収集するために、委員より話題提供を受けた。</p>
<p>委員会活動の問題点・課題</p>	<p>1. 先端研究や建築事例・プロジェクトの話題提供を受け議論することに十分な時間の確保が難しい。年間の活動計画のロードマップを明確にして、それに基づいて委員会を開催するよう努める必要がある。</p> <p>2. 小委員会メンバーは北海道から九州まで各地に在住している。旅費の工面が難しく欠席を余儀なくされる場合もあり、予算を充実させる必要がある。また、インターネット環境を活用した会議開催についても検討する必要がある。</p>

- * 小委員会活動成果報告書は本書式を基本とする。ただし、それぞれの本委員会において活動実績を報告する共通項目があれば、最下段に項目を追加して記述してもよい。
- * 表中の「(書名)」等の赤文字は、記述を誘導するための説明である。記載の有無にかかわらず最終的には削除のうえ提出すること。
- * 小委員会活動成果報告書は本書式を基本とする。ただし、それぞれの本委員会において活動実績を報告する共通項目があれば、最下段に項目を追加して記述してもよい。
- * 中間年度には中間評価を、最終年度には最終評価としての自己評価を記入すること。

環境工学委員会用 自己評価欄

20 年度 小委員会活動 自己評価

(中間年度評価・最終年度評価)

総合評価 (4段階評価)	A	B	C	D
総合評価に関する 自由記述欄 (理由、特記事項等)	<p>小委員会では、</p> <ol style="list-style-type: none"> 1)国内外における環境建築の事例を収集し、これまでに蓄積した事例・研究データと統合し、建築・都市のデザイン事例（ハード技術）を整備する。 2)BD から見た環境建築の評価手法のプロセスの構築に向けて、事例評価を試行する。 3)大学での教育現場での環境設計教育の実践例を収集し、データベース化する。について活動を行った。 <p>1)~3)のいずれも、4回の小委員会の中で、毎回、話題提供を行い、事例や研究データを蓄積した。また、9月上旬に札幌のバイオクライマティック建築を巡るツアーを実施し地元建築家と議論する機会を設け、特に、1)、2)について知見を深めた。</p> <p>2)については、適応モデルWGを中心として検討を進め、エビデンスデータを得るための調査を企画し、準備を進めることができた。</p>			

- 総合評価は4段階(A>B>C>D)にて、自己評価すること。
- 中間年度における自己評価は、単年度の活動計画・目標に対する達成度にて、最終年度における自己評価は、小委員会の設置目標に対する達成度にて評価する。自己評価の目安は以下の達成度レベルを参照のこと。
 - A 評価：小委員会設置目標に対し、80%以上の達成度
 - B 評価：小委員会設置目標に対し、70%から80%の達成度
 - C 評価：小委員会設置目標に対し、60%から70%の達成度
 - D 評価：小委員会設置目標に対し、60%以下の達成度
- 小委員会の活動に対し、第三者的評価・外部評価（シンポジウム、セミナー等の催し物を開催した場合に収集した参加者の評価など）に相当する情報がある場合には、その内容も記述すること。